

トカラ列島における無人島（横当島・臥蛇島）の考古学踏査

著者	新里 貴之
雑誌名	南太平洋海域調査研究報告=Occasional papers
巻	56
ページ	9-12
別言語のタイトル	Archaeological Survey on the Uninhabited Yokoatejima and Gajyajima Islands, the Tokara Islands, Kagoshima
URL	http://hdl.handle.net/10232/24841

トカラ列島における無人島（横当島・臥蛇島）の 考古学踏査

新里貴之

Archaeological Survey on the Uninhabited Yokoatejima and Gajyajima Islands, the Tokara Islands, Kagoshima

SHINZATO Takayuki

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
Research Center for Archaeology, Kagoshima University

要旨

トカラ列島 12 島のうち、考古学調査の実施されていない 2 つの無人島、横当島と臥蛇島の分布調査を行った。横当島は有史以来、無人島とされる火山島であり、臥蛇島は文献記録上、中世には居住が確認され、1970 年以降無人となった島である。踏査の結果、横当島ではいわゆる『南島雑話』の記載通り、沖縄久高島人が奄美の漁民が持ちこんだと思われる 19 世紀代の沖縄壺屋窯産荒焼の破片が 2 個体分確認され、臥蛇島では古代から近世に及ぶ土器・土師器や徳之島産カムイヤキ、中国龍泉窯系青磁、肥前磁器や薩摩焼および中国清朝磁器などをかなりの数量で認めることができ、臥蛇島の歴史が明らかに文献以前の時代にさかのぼることを実証した。

はじめに

国際島嶼教育研究センターでは、平成 26 年度の調査地域として大隅諸島を射程としているが、筆者は諸般の事情から、その南隣に位置するトカラ列島の無人島、横当島、臥蛇島の考古学的分布調査を行った。渡島に際しては南西島弧地震火山観測所の全面的なご協力を得て実施した。

トカラ列島のなかでもほとんど考古学的情報のない横当島、臥蛇島であるが、横当島は有史以来無人島であるとされるものの、江戸期の幕府撰絵図でも火山島としての存在は認められており、幕末には、名越左源太のいわゆる『南島雑話』（1881 年～1885 年の記録）において、沖縄久高島人や奄美大和浜の漁民が漁撈活動で訪れていることが記載されている（名越 [国分・恵良校注] 1984a, 1984b）。

いっぽう臥蛇島は、島津の十二島地頭職の譲与や料所などの書状（1436年）や種子島家への上納品目（木綿・鯉節・小桶）の日記（1513年）によって支配者層との関係で知られるようになる（十島村誌編集委員会 1995）。また、1450年に朝鮮人が臥蛇島に漂着し、島に30余戸の住居があったことが正史『朝鮮王朝実録』から窺える。1471年選集の『海東諸国紀』（申〔田中訳注〕 1991）の地図にも描かれている。1970年7月末には島民全員が他地域へ移住し、有人島としての歴史の幕を閉じた。

調査結果

横当島では、東峰麓にある2箇所的大型火山弾の近隣で、沖縄壺屋窯産荒焼（アラヤチ）破片を採集することができた（図1）。総計5個で、おそらく2個体分の破片である。器種は大型（口径15～17cm、器高60～70cm、底径20～30cm）の壺あるいは甕に相当する。焼成・器面調整、器色などから判断して、19世紀代の荒焼である。遺物量は極めて少ないが、切り立った崖の上部に位置するので（標高約25～30m）、明らかに人が渡島して持ち込んだことは明らかである。

臥蛇島は、標高約50mの切り立った崖上に集落跡が確認できる（図2）。1970年まで人が住んでいたこともあって、近世～現代の遺物が、集落跡全域にわたって分布している。特に江戸時代以降の水甕、味噌甕、焼酎甕の類（壺屋焼・薩摩焼・硫酸瓶）が完形品のまま、土間跡や住居脇に横たわっている。中世の遺物も近世以降の遺物と比べるとかなり数は減るが、やはり同じような分布状況である。

集落は緩い傾斜地を段々に切り、造成して平坦地をつくりだし、その上に住居を建てていたとみられる。集落跡奥部にもそのような切り通しを確認することができるが、そこに幅50cmほどの良好に残る遺物包含層を確認することができた。断面で確認できる遺物は、土器や土師質の焼物のみである。口縁部がなかったため、その時期を



図1 横当島



図2 臥蛇島

判断するのは難しいが、古代以前の可能性が高い。集落跡で採集できた遺物の種類は、土器・土師器（先史時代～古代）、徳之島産カムイヤキ（11～13 世紀前半）、中国竜泉窯系青磁（12～15 世紀）、肥前磁器（17～19 世紀）、薩摩焼（17～19 世紀）、壺屋産荒焼（17～19 世紀）、中国清朝磁器（18～19 世紀）などである。これらのうち破片で確認できるものの大半は、1970 年までに行われた平坦地をつくるための傾斜地削平の際に掘り出されたもの、とみなしておくほうが妥当であろう。

考察

横当島には水がほとんどない。2 個体の沖縄壺屋窯産荒焼は 19 世紀代のものであり、19 世紀後半期の記録である『南島雑話』の横当島の項目によれば、エラブウミヘビや魚類を採りに来た沖縄久高島人、あるいは奄美大和浜から貝採りに来た奄美人の漁民によってもたらされたと考えるほうが妥当であろう。同じ大きさの壺の完形品が 17kg あり、水をいっぱいに入ると総計 60kg を超える重量となり、また、接岸部から崖をよじ登らなければならないため、水を多量に入れて持ち込むのは極めて困難である。これらのことから、漁撈活動を目的とした一定居住に伴う天水溜めのため、持ち込まれたものと理解される。

臥蛇島における中世～近世の遺物は、時代的な遺物量の多寡はあるものの、離島時の集落跡全域に分布しており、文献上の記録と合致している。しかし、集落奥部の削平切り通し断面には、より古い土器・土師器類を確認することができ、臥蛇島の有人島としての歴史を、文献記録よりも、少なくとも一階梯古く見積もることができることが判明した。

おわりに

今回の調査は、一島 5～6 時間程度の分布調査一回限りの成果であり、その調査は未だ緒に就いたばかりである。特に臥蛇島においては、今回の遺物包含層の発見だけでなく、過去には弥生土器が採集されたともいわれ（三友 1954）、段ボールいっばいの石斧が掘り出されたという話も残されているが（稲垣 1978）、今ではその所在は不明となっている。そのため、今後の踏査や発掘調査によるデータの積み重ねを必要とする。継続調査を実施し、その詳細を明らかにしていきたい。

最後になりますが、渡島の便をとって下さった南西島弧地震火山観測所の八木原寛氏およびお誘いいただいた国際島嶼教育研究センター長嶋俊介氏に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 稲垣尚友 1978. 山羊と芋酎：ナオトモのトカラ, 228 頁, 未来社, 東京.
- 十島村誌編集委員会編 1995. 十島村誌, 1758 頁, 十島村, 鹿児島.
- 名越左源太 (国分直一・恵良宏校注) 1984a. 南島雑話 1 : 幕末奄美民俗誌, 209 頁, 平凡社, 東京.
- 名越左源太 (国分直一・恵良宏校注) 1984b. 南島雑話 2 : 幕末奄美民俗誌, 243 頁, 平凡社, 東京.
- 三友国五郎 1954. トカラ列島誌. 埼玉大学紀要人文・社会科学篇, 3 : 156-179.
- 申 叔舟 (田中健夫訳注) 1991. 海東諸国紀, 440 頁, 岩波書店, 東京.